

## “体罰”は幼児期に

「幼児期に厳しい躰を」と申しましたが、それは、まだ判断力の出来上がっていない幼児ゆえに、身体で覚えさせるしか方法がないからでした。そうすることによって、身体が自然とそのように、つまり美しく動くようになる、ということで“躰”という字も作られたわけです。

幼児というものは、だれでも実に辛抱強い性質を持っているものです。例えば、這い這いを始めるようになりますと、どんな障害でもこれを乗り越えて進もうと、努力して止みません。また、立って歩くことを始めますと、どんなに転んで痛い目にあっても「もう歩くことは止めた」と言って諦める赤ちゃんは、一人だってあったためしがありません。

それはどんな子供でもそうなのですから、子供はみんな強靱な意志を持っていて、どんなに厳しい試練にも耐え抜けるように、初めから生まれついているのだと、つくづくそう感じさせられます。だから、幼児をしつけるにあたっては、幼児への思いやりから、厳しさに欠けるようでは、かえって子供のためにならないわけです。

こういう厳しい躰によって、立派な行動が自然と出来るようになりますと、周囲から褒められますし、それが自信につながり、自分の判断力で自主的に行動するように成長していきます。よくほったらかしにしておけば自主性が伸びる、と言う教育者がいます。とんでもないこと

です。

スピードのある車ほどブレーキが肝腎のように、能力の高い人間には自制心が特に肝腎です。折角立派な大学を出て、広い知識や高い能力を身につけながら、自制心が弱いために悪の誘惑に負けて、身を亡ぼす者が少なくありません。

その原因は、幼児期にわがままいっぱい育てられ、思うがままに生きて来て、自分の欲望を抑えるということの重要さを、親から全く教えられなかった、ということに因るものが多いようです。

三つ子の魂百までも。幼児期にその人の性格が出来るのですから、親としてはこの時期に最善を尽すことが必要です。親が最良の教師となれるのは、この重要な時期を親が預かっているからです。

個性らしいものが現れて来るのは3歳ころからですが、厳しい躰は3歳ころまでに終るようにすることが望ましいことです。それは、そのころまでが最も受容性に優れていて自然に身につく、またどんな厳しさにも最もよく耐えられる時期だからです。

体罰などはこの時期に限ります。幼児に体罰などかわいそうだ、と思われるかも知れませんが、実は幼児ほど体罰に耐えられる時期は他にありません。体罰に対しては幼児が最も強いのです。その上、この時期の体罰は記憶に残らず、悪い思い出になる心配がありません。わが子に信頼されこそすれ、背かれることは決してありません。